

“子どもは大人の鏡”

教育委員会委員

橋本 和明

「子どもは大人の鏡」というのを聞かれたことがあるかもしれません。小さい子どもであつたとしても実に大人のやることをよく見ていて、良い悪いもわからずにまねをすることがあります。そんな子どもを見て、大人の側が自分自身を振り返るのです。また、子どもの様子を見ていると、大人や社会のしわ寄せが子どもに降りかかっていると感ずることがあります。例えば、家庭内での夫婦の不仲や DV が子どもに想像以上にストレスを与えてしまうのです。それだけ子どもは大人からの影響力を受けやすく、知らぬ間に子どもがそれを身に付け、大人の問題を再現してしまうのです。

私は、もっとも顕著なものがいじめではないかと考えています。いじめる側といじめられる側、そして傍観者の存在。この構図は何もいじめだけに限ったことではありません。家庭での虐待や社会でのハラスメントなどがこのいじめと非常によく似たところがあります。そこには、人間関係を力で無理矢理押し通そうとしたり、役割や立場にこだわってしまつて、本来あるべき人間関係がどこか損なわれてしまつている点が共通しています。また、それを見て見ぬふりをしてしまう第三者の存在も事態をますます深刻化させていく大きな要因になってしまうところも同じです。そうなると、関係性という面ではますます破綻を来したりひずみが大きく拡がってしまうのです。

われわれはいじめを子どもだけの世界に限ったことと捉えずに、われわれ大人の間関係のあり方を映していると考えてはどうでしょうか。今一度、「子どもは大人の鏡」として捉え直してみる必要があるのではないのでしょうか。